

腹部超音波画像による胆のうポリープの検出状況について

○ 武田江美子 菅野千恵美 那須野紀子
渡辺 伸 中島久和

公益財団法人 福島県保健衛生協会

【はじめに】当協会では、平成16年度より集団検診として検診車による腹部超音波検査を実施している。

今回、胆のうポリープに関する詳細情報を活用し、事後指導を行っているA事業所について、その検出状況を検討したので報告する。

【対象と方法】平成16年度から平成23年度までに、A事業所で腹部超音波検査を受診した4,312名を対象として、胆のうポリープの検出状況を調査した。また、平成21年度に胆のうポリープが認められた103例のうち、その後

3年間経年的に受診した59例についてその推移を検討した。

【結果】胆のうポリープの発見率は、16年度9.8%、17年度10.2%、18年度11.7%、19年度13.9%、20年度16.0%、21年度18.1%、22年度19.3%、23年度17.3%と年々増加していた。21年度に胆のうポリープを認めた103例のうち、ポリープ最大径が5mm未満は79例、5mm以上10mm未満は23例、10mm以上は1例であった。21年度以降3年間継続受診した59例中54例は、ポリープの大きさに多少の変動はあったものの毎年描出されていた。残りの4例は、隔年で描出され、いずれも5mm未満の小さなポリープであった。1例は、21年度と22年度は9mm大のポリープであったが、23年度は16mm大の胆石になっていた。毎年描出されていた54例の中に、胆のう体部に微小ポリープ1個を有していた受診者から、翌年、新たにその底部に8mm大のポリープを認めた。

【考察とまとめ】所見の変化が大きかった2

症例のうち、1例はポリープ様所見が胆石疑いと診断され、他の1例は、胆のう底部のポリープを見落とししたと考えられた。当協会の超音波判定区分では、10mm未満は、個数を考慮して年1回の検診受診の勧奨もしくは半年後病院で再検、10mm以上または腫瘤を疑う場合は専門医療機関での精検をすすめている。

A事業所には、産業医の依頼により、20年度からは胆のうポリープの数と大きさも報告している。産業医の手元にこれら詳細情報があることは、その後のきめ細かな事後指導をすすめる上で役立つものと考えられる。

このように、超音波検査の結果報告にあたっては、これら詳細情報を加えることの意義が非常に大きいと考えられるので、今後も受診者のメリットになると思われる情報は、できるだけ多く流せるよう努力して行きたい。